

第4分科会

『子どもたちと共に育つ保育者を目指して』

指導助言者	川崎 徳子先生 (山口大学教育学部 准教授)
担当園	学校法人 守護の天使学院 宇部さゆり幼稚園
司会者	丸田 幸正 (宇部さゆり幼稚園 園長) 西田 知子 (小松原幼稚園)
発表者	三隅 芙美枝 (宇部さゆり幼稚園)
記録者	細馬 泰子 (宇部さゆり幼稚園) 藤井 美智子 (小松原幼稚園)

1. 発表の概要

(1) テーマ設定の理由

子どもたちの活動や生活の様子が数年前とは異なると感じるがよくある。今の子どもたちの生活や遊びにしっかりと目を向け、子ども主体の保育やカリキュラムを見直し、子どもたちの生活を記録してきた。日々の過ごし方、様々なエピソードなど実態を整理し、私たちが行う保育の中で、「教えて育てる=教育」と「共に育つ=共育」を実現させていきたいと思った。

(2) 研究の概要

- ① ・子どもが喜ぶ遊びはどんなことだろう? ・どんな時に夢中になっているだろう? など、子どもたちの生活を観察し、子どもが主役の保育の充実を図る。
- ② 子どもたちの声を大切に活動や遊びを進め、発展や展開の面白さを再確認する。
- ③ 子ども主体≠子どもの好き勝手。仲間との遊びを奨励し、学習や学びの環境を整える。
- ④ 当園のカトリック教育を通じて、言葉づかいや人への優しさ、思いやりを伝えるため、「マザーテレサの生き方」を子どもたちと共に考え、心に響く保育をしていきたい。

(3) 研究発表の内容及び事例

◎子どもの姿が変わってきたと考えていること自体が『保育者主体』の考え方であり、理想的な子どもの姿を勝手にイメージしていることに気付く。『子ども主体の保育』を見直すため、今のありのままの子どもたちの姿の中からエピソードを見つけ、遊びや生活に目を向ける。



事例①「子どもの姿～子どもたちが遊びの中で必要としているもの～」

【砂場遊び+水】

「先生!水を下さい!」の一言で、泥団子づくり、池や川づくり、砂場に出る泡の発見や解明など、子どもたちの遊びが夢中になっていく。

【子どもたちの遊びの発展・夢中になる姿】



←ガムテープが上手く切れないKちゃん

漏れている水を止めたいT君→



子どもたちが遊びの中で、新しいことにチャレンジしたり、何かをイメージして工夫を凝らしている姿に気付く。遊びの中で、子どもたちが“上手くできないこと”は失敗ではない。何度も挑戦できる環境とそれを過干渉せず見守る余裕が大切なのではないかと感じる。「自分でできた！」という経験は、観察力、自学する力を高め、自信につながる。そして、豊かな感性や自尊心をしっかりと育てることができる。



事例②「こいのぼりパーティーみたい！！」

教室に飾ったこいのぼりを見て「こいのぼりパーティーみたい！！」と喜ぶ姿をきっかけに、パーティーがしたい子どもたちが、母の日の参観日に合わせて、主体的に計画し、活動を進めた。『子ども主体の保育』の中には“正解”も“失敗”もない。それぞれの工夫や個性に溢れる作品が仕上がりに、大きな達成感を味わうことができた。活動をする時に「これを作ろう」「こんな風にしてほしい」と考えていた保育者主体の考え方が、「何ができるだろう」「これはどうなるのだろう？」と子どもたちの活動の発展に期待し、わくわくできる時間となった。



事例③「水族館づくり～1学期の集大成～」

【毎日の子どもたちの遊びや生活が繋がって広がった活動】

◎水族館を作るために…大きな水槽・水もいっぱいいる・岩や海藻やサンゴがいる。

『お魚の住むところ作らないとね！！』

- ① 巨大水槽づくり（クレパス＋うす絵の具）
子どもたちの描く世界（共育）は、準備する教材やそれを出すタイミング（教育）が大切。
- ② ジンベイザメの共同作業
ジンベイザメの大きさや水族館の水槽のイメージを子どもたちと共有し、共同作業の中で、協力する経験や譲り合い、認め合う思いやりの心を育む。
- ③ 海の生き物づくり…各自で画用紙を使って制作し、自由に張り付ける。
- ④ 光る魚づくり…アルミホイルで作った魚を糸などで吊るす。



遊びの継続
魚づくりがとまらない。
粘土遊びも水族館になる。
職員室でゴミになるものの再利用
→クラゲや深海の表現など



子どもたちが楽しいと感じ、
夢中になる時、
いろいろな形で遊びが継続する。

事例④「咲かないアマリリス」

年長児の部屋にあるアマリリスの鉢が気になっていた年中H君は、なぜアマリリスの花が咲かないのか不思議に感じていたらしい。

保育者に尋ねたことがきっかけで、咲かない理由を一緒に調べることができた。さらに、どうしても花を咲かせたいH君は、「折り紙で花を咲かせたらいい」と提案する。思いもよらない発想だったが、賛成した年長児が折り紙を折り、思いやりにあふれる場面も生まれ、とても素敵なエピソードになった。



事例⑤「マザーテレサの心に習う」

カトリック教育の一環として、マザーテレサの生き方を子どもたちと一緒に考え、隣人の愛、無償の愛を学ぶ。子どもたちにとって難しいかもしれないと思うことでも、子どもたちは心で感じ取る力がある。正しい言葉・美しい言葉は、誰の心にも届くもので、教えて育つ大切な教育になる。

(4) 成果と今後の課題について

◎今、目の前にいる子どもたちの姿を見つめよう。

◎子どもたちの生活の中に、小さなエピソードを見つけよう。

◎子ども主体≠子どもの好き勝手

守るべきルールやマナーは伝えよう。



子どもと一緒に生活をする

保育＝『子どもたちとの生活の場』



◎「先生！見て！」は、子どもたちの夢中のサイン。

～ちょっと忙しい手を止めて、子どもたちの声に耳を傾けよう。

私たちの仕事の中には、育つという字がたくさんある。保ち育てる“保育”・教えて育つ“教育”・共に育つ“共育”・協力して育つ“協育”。いつも育ちの中にいる私たちは、子どもたちに何を教えようか、何をさせようかと考えるのではなく、子どもたちと一緒に生活をし、共に成長していける存在であるべきではないだろうか。今、しきりに言われている“質の高い保育”・“子ども主体の保育”は、最初から準備されるものではない。保育を『子どもたちの生活の場』としてとらえ、子どもたちの姿に気付いた時に生まれるものだと思う。だからこそ、子どもと共に遊び、共に喜び、共に悲しみ、共に悩み、共に生活して成長していける『共育者』でありたい。忙しいときにこそ、立ち止まり、子どもたちの声に耳を傾け、子ども主体を自然に感じていける生活を大切にしたいと思う。



2. 研究討議（グループ討議）

（1）『エピソードトークをしよう』

日々の保育の中での子どもたちの姿を振り返り、ちょっとしたエピソードや発言を分かち合うことで、笑い合い、保育の楽しさや喜びを感じながら、目指す保育者の姿や、保育の中で大切に思うことを考える。

（2）『保育とは？と考えた時、一文字の漢字で表すとどんな漢字になるだろう』

エピソードトークや、保育者として思うことを分かち合った内容をもとに、保育を漢字一文字で表してみる。



- ① 『楽』 子どもと共に楽しく保育しているとクラスがまとまり、子どもの成長を感じる保育者も子どもたちも**楽しめる**保育をしていきたい。
- ② 『愛』 活動時間に追われがちだが、子どもの気持ちが伝わったとき、**愛情**をもって話を聞き、寄り添う保育者になっていきたい。
- ③ 『新』 コロナ渦で保育の見直し、振り返りができた。コロナ渦が明けて、**新しいこと**に取り組もうとしている。
- ④ 『共』 子どもたちのやってみたい気持ちを尊重して任せながら、保育者も同じ温度で楽しみ、保育者として**共に**成長する。
- ⑤ 『主』 子どもたちがやりたいことを、保育者が止めずに最後まで一緒にやる。保育者が答えを出すのではなく、子どもたちの**主体性**を大切にしたい。
- ⑥ 『待』 収穫した野菜の食べ頃を**待つ**。思わず差し伸べたくなる援助の手を出さずに**待つ**。保育の中で生き急ぐのではなく、**待つこと**で子どもたちの成長がある。
- ⑦ 『異』 **異年齢**保育は、お互いに成長がみられとても良い。
金子みすゞの「みんなちがってみんないい」にもあてはまる。
- ⑧ 『伸』 子どもたちの成長を**伸ばす**方法、関わり方について話し合う。子どもの「みてみて」から準備できる環境や言葉の出ない未満児の表情の観察も大切にしたい。
- ⑨ 『受』 子どもたちの姿や表情を**受け止める**ことで、保育者も一緒に学ぶことができる。興味、発見、夢中になっている姿を見逃さず、きっかけ作りをすることが大切。
- ⑩ 『余』 子ども主体の保育とは、保育者の許容範囲を広げ、線引きせずに見守ること。
そのために、心の余裕をもった保育者になりたい。

（3）グループ討議のまとめ

・漢字が重なっていない。各グループのそれぞれの先生方が、多様な努力、取り組みをして子どもたちと向き合っていることが分かる。意義深い。（川崎徳子先生より）

・子ども主体、質の高い保育は後からついてくる。忙しい時間の中で立ち止まり、子どもの姿が見えた時、個性に気付いた時こそ、保育者の成長の瞬間ではないだろうか。今日から新しいスタートを切って、明日からの保育に役立てて欲しい。（発表者より）

3. 川崎徳子先生の指導助言



『保育を創る …こどもと保育者と、そして…』

◎誰かのことを思う＝幼児期に大事にしていきたいこと

第4分科会では、折り紙で作ったヒマワリの名札を配った。参加者を思い準備したことに触れ、一緒に過ごす誰かのことを思いながら、自分に出来ることを考え、社会は作られていくこと。その最初に触れられるのが保育者であり、気持ちに触れることが大事であると評価された。

◎研究発表について

発表者が実践の中で日々思い悩みながら、そこに問いを持ったことが大切である。日々に追われると、自分がやることに趣が置かれていってしまうことが保育の難しいところであり、保育者の思いと保育の実際、子どもの実態がうまく重ならなくなった時、大変になる。子どもが変わってきたかと思っていたことを、保育者主体の考え方ではと気づき、保育の見直しを考え、子どもと共に育つ保育者へと繋げている様子がよく分かる。本来、教育の目的は、子どもたちの育ちを支えること、最終的には、子どもが社会の中で自立していくことである。しかし、やらないといけないことに追われて、隠れてしまう。子どもが育つところに思いをはせていくことが大切だと伝えたい。

日々の子どもの姿をもう一度しっかり見ると同時に、環境を考えていくことが大切である。購入玩具だけに頼らず、いつでも自然物が使えるようにする。そして、保育者は必要以上の関わりを避けて、“一緒に生活する”ことの意識を大切にする。何か問題が起きた時、生活の中の課題として捉え、計画だからやるのではなく、生活の中の出来事として向き合う姿こそが『保育を創る』ことである。今の子どもの姿・遊びの見方を捉え直すと、カリキュラムの在り方と保育実践を見直す必要が出てくるが、今回の発表のように、保育を自分と子どもとの生活の中のこととして捉えることが出来ると自然な流れになる。

*子どもたちの環境を保証するための大事な基準の一つに幼稚園教育要領がある。

➡幼稚園教育要領 第1章 総則 大 幼児期の基本より

・子どもと環境との関わり方、育つ・学ぶを支える子どもの姿がかかっている。「こどもと共に」が幼児教育容量の中でも大事にされている。心身とは、内面を含めた心の育ち、からだと共に脳の育ち、機能、構造の変化を指していて、中身の部分も、日々の生活の中で育っている。そこを思いながら保育ができるということがプロフェッショナル、専門性の部分である。

・環境と関わりながら、乳幼児期の総合的な育ちを支えるためには、子どもと共に創り出す日々の生活と保育実践が大切である

○発表内容の保育実践について

① 戸外遊び…目線を変えて子どもの姿を見ることで“こんなことを思っていたんだ”“こんな体験をしているんだ”と見えていなかった姿に気付く。子どもは保育者と一緒にいることで生活が豊かになり、「先生見て!」「先生できた!」と伝えたい、共有する空間を味わう姿が見られ、遊びが大きく展開していく。

- ② こいのぼり／水族館…「パーティーがしたい」、「水族館をつくろう」と子どもたちが楽しみながら遊びの継続と展開を繰り返している。保育者のこうなっていてほしい、これを経験してほしいと指導計画上の見通しはあっても、思い通りにはいかないことが多い。そこをどうやりくりしながら、生活として創っていくかが保育の展開である。
- ③ 咲かないアマリリス…他のクラスの気になる子の様子を先生は見ていたということ。何を思って毎日アマリリスを見ていたか、先生が受け止めている。また、他の子どもたちも同じような疑問を抱いており、一緒に花を咲かせる遊びが展開した。幼稚園は一人ひとりが育つ場であり、誰かと集団で生活する最初の場所である。日々の生活の中で、自分以外の誰かの思いに触れることは、社会の中で大事な力を積み重ねていくベースになる。自分以外の人を思うことをどう育てていくかが、保育の中で大切にしたいことである。

◎幼児期の遊びを中心とした総合的な指導～生活科 アクティブラーニング視点～

○主体的対話的で深い学びを支えていくために指導計画の必要性。

子どもの生活を知った上で幼稚園教育は、幼児が自ら意欲を持って環境と関わることにより作り出されるより具体的な活動を通して、その目標の達成を図るものである。幼児の活動に沿った柔軟な指導を行わなければならない。指導計画はあらかじめ考えた仮設であること、幼児の発想や活動の展開の仕方を大切にしながら、適切に環境の構成、再構成、援助が必要になってくる。具体的な指導は幼児の生活に応じ常にかえていくものであり、幼児の発達や内面の動きなどに触れて考えていくと良い。子どもの姿を捉え大切にしながら、また子どもを思いながら共に生活して考えていく。環境構成では発想を大切にしながら、直接的対話、やりとりを通しての対話、教材の工夫、環境の再構成、上手く行かなかった時も、保育は毎日続くものなので、次はここは大事にしていこうとすることで、生活や暮らしをつくっていくという良さ、楽しさになる。幼児の活動は生活の流れの中で常に変化していくものであり、教師は必要な援助を重ねること、展開に応じて柔軟に考えること、状況に応じた多様な関わりが大事である。単に教師が望ましいと思う活動を一方的にさせたり、幼児に様々な活動を提供すればいいのではなく、幼児が心動かされる体験が次へと繋がり、幼児自身の内面の成長につながっていく。一人一人の体験を理解し、教師が共有共感する。体験からどのようなことに興味関心を持ったか、何を学んだのかを理解する。入園から就学までの日々の生活は繋がり、育っているのです。考え、見通しを持って行くことが大切である。

◎おわりに

保育者も生活者であり、子どもと共に保育を創るということ。そこには、専門性としての評価がついてくる。子どもと共に生活するという気持ち、忙しい中でも立ち止まり考えていくことが、社会の中で誰かを思いながら生活するという子どもの時代を創っていく。

